

先生への通信

寺田寅彦

青空文庫

ヴェニスから

お寺の鳩^{はと}に豆を買ってやることは日本に限ることと思っていましたがこのサンマルコのお寺の前でも同じことをやっています。ただし豆ではなくてとうもろこしを細長い円^{えんす}錐^{いけい}形の紙袋につめたのを売っています。

大道で鍋^{なべ}を煮立たせて、ゆでだこを売っている男がいました。

ヴェニスの町は朽ちよごれているが、それは美しく朽ちよごれているので壁のはがれたもの、ないしは窓からぶら下げたせんたく物までも、ことごとく言うに言われぬ美しくくすんだいい色彩を示しています。霜枯れ時だのに、美しい常磐木^{ときわぎ}の緑と、青玉のような水の色とが古びた家の黄や赤や茶によくうつります。

ゴンドラもおもしろく、貧しい女も美しく見えます。

(明治四十三年一月、東京朝日新聞)

ローマから

ローマへ来て累々たる廢墟はいきよの間を彷徨ほうこうしています。きようは市街を離れてアルバノの湖からロツカディパパのほうへ古い火山の跡を見に参りました。至るところの山腹にはオリーブの実が熟して、その下には羊の群れが遊んでいます。山路で、大原女おはらめのように頭の上へ枯れ枝と蝙蝠傘こうもりがきを一度に束ねたのを載つけて、靴くつした下をあみながら歩いて来る女に会いました。角つのの長い牛に材木車を引かせて来るのもあれば、驢馬ろばに炭俵を積んで来るのもありました。みかんの木もあれば竹もあります。目と髪かみの黒い女が水たまりのまわりに集まってせんたくをしているそばには鶏が群れ遊び、豚が路傍で鳴いています。バチカンは一部見ましたが、ここの名物はうまい物ばかりのようであります。

(明治四十三年二月、東京朝日新聞)

ベルリンから(一)

今ここのベルリイナア座で「タイフン」という芝居をやっています。作者はハンガリー人で、日本の留学生のことを仕組んだものだそうです。たいへん人気がいいようであります。

す。主人公の日本人の名がドクトル・タケラモ・ニトベというのだそうで、このタケラモだけでも行つて見る気がしなくなります。人の話によるとなかなかよく日本人の特性をうがつていて、むしろ日本人の美点を表現しているようですが、タケラモに恐れてまだ見ません。

（明治四十三年四月、東京朝日新聞）

ベルリンから（二）

今度の旅行中は天氣の悪い日が多くて、ことにスイスでは雨や霧のためにアルプスの雪も見えず、割合につまりませんでした。それでもモンブランの氷河を見に行つた日は天氣がよくておもしろうございました。寒暖計を一本下げて氣温を測つたりして歩きました。つるはしのような杖つえをさげて繩なわを肩にかついだ案内者が、英語でガイドはいらぬかと言うから、お前は英語を話すかときくと、いいえと言いました。すべらない用心に靴くつの上へ靴下をはいて、一人で氷河を渡りました。いい心持ちでした。氷河の向こう側はモーヴェ・パーという險路で、高山植物が山の間に花をつづり、ところどころに滝があります。ここ

から谷へおりる途中に、小さなタヴァンといったような家の前を通ったら、後ろから一人追っかけて来て、お前は日本人ではないかとききますから、そうだと答えたら、私は英人でウエストンというものだが、日本には八年間もいてあらゆる高山へ登り、富士^{ふじ}へは六回登ったことがあると話しました。その細君は宿屋の前の草原で靴下を編んでいました。そこから谷底へおりてシャモニの村まで歩きましたが、道ばたの牧場には首へ鈴をつけた牛が放し飼いにしてあって、その鈴の音が非常にメロディアスに聞こえます。また番人の子供やばあさんもほんとうに絵のようで愉快でした。日本にもあるような秋草が咲いていた、踏切番の小屋に菊が咲いていたり、路傍のマリヤのみ堂に花が供えてあるのも見ました。シャモニの町へはいるころには、もう日が暮れかかって、まっかな夕日がブゾンの氷河の頂を染めた時は実にきれいでした。村の町には名物の瑪瑙^{めのうざい}細工やら牛の角細工を並べた店ばかり連なって、こういう所にはおきまりのキネマが自働ピアノで客を呼んでいました。パリあたりから来ているらしい派手な服装をした女が散歩していました。

シャモニからゼネヴへ帰って、郊外に老学者サラサン氏をたずねました。たいへん喜んで迎えてくれ、自分の馬車にのせて町じゅうを案内してくれました。昼飯をよばれてから後にその広い所有地を見て歩きました。この人の細君が私どもの論文を仏訳してここの学

術雑誌に載せてくれたのだそうです。ここはもうフランスの国境近くで、屋敷のベランダから牧場越しに国境の森が見え、またヴォルテールの住まっていたという家も見えます。

毛氈もうせんのような草原に二百年もたった柏かしわの木や、百年余の栗くりの木がぽつぽつ並んで、その間をうねった小道が通っています。地所の片すみに地中から空気を吹き出したり吸い込んだりする井戸があつて、そこでその理屈を説明して聞かせました。低気圧が来る時には噴出が盛んになつて麦藁帽むぎわらぼうくらい噴き上げるなどと話しました。それから小作人の住宅や牛小屋、豚小屋、糞堆ふんたいまで見て歩きました。小作人らに一タアローと声をかけて、一言二言話していました。農家の建て方など古い昔のままだそうです。

屋敷の入り口から玄関までは橡とちの並み木がつづいています。その両わきはりんご畑でちようどりんごが赤く熟していました。書斎にはローマで買って来たという大理石の半身像が幾つもある。サラサン氏は一々その頭をなでその顔をさすって見せるのでした。その中に一つ頭の大きな少年の像があつてたいへんにいい顔をしている。先生の一番組の嬢さんがまだ子供の時分この半身像にすっかりラヴしてしまつて、おとうさんの椅子いすを踏み台にしては石像に接吻せつぶんしたそうです。そのさまを油絵にかかした額が客間にかかつていました。霧があつて小雨が降つて、誠に静かな日でした。

ゼネヴからベルン、チューリヒ、ルツエルンなどを見て回りました。ルツエルンには戦争と平和の博物館というのがあって、日露戦争の部には俗悪な錦にしきえ絵がたくさん陳列してあったので少しいやになりました。至るところの谷や斜面には牧場が連なり、りんごが実って、美しい国だと思いました。

それからストラスブルクを見て、ニュルンベルクへ参りました。中世のドイツを見るような気がしておもしろうございました。ラートハウス市庁の床下の囚獄を見た時は、若い娘さんがランプをさげて案内してくれました。罪人は藁わらも何もない板の寢床にねかされて、パンも水ももらえなかったと話しました。いっしょに行ったチロル帽の老人がいろいろな質問を出すけれども、娘の案内者は詳しい事は何も知らない所以要領を得ませんでした。これから地下の廊下を十五分も行くと深い井戸があるが見に行きますかという。しかし老人の細君が不賛成を唱えてとうとう見ずに引き返しました。それから画伯デュラーの住居の跡も見ましたが、その入場券が富札とみふだになっています。名高い古城の片すみには昔の刑具を陳列した塔があります。色の青い小さい女が説明して歩く。いっしょに見て歩いた学生ふうの男がこの案内者に「お前さんのように毎日朝から晩まで身の毛のよだつような話を繰り返していてそれでなんともありませんか」と意地の悪いことをきくと女はただ苦笑してい

ました。私はその埋め合わせのようなつもりで、絵はがきを少々ばかり買ってやりました。
 そうして白銅一つやって逃げて来ました。ミュンヘンでは四日泊まりました。ピナコテー
 クの画廊ではムリロやデューラーやベクリンなどを飽くほど見て来ました。それからドレス
 デンやらエナへ行つて後、ワイマールに二時間ばかりとどまって、ゲーテとシラーの家を
 見ました。ゲーテが死ぬ前に庭の土を取り寄せて皿さらへ入れて分析しようとしていたら、急
 に悪くなつたのだそうで、書斎の窓の下の高い書架の上に土を入れた皿が今でも置いてあ
 ります。隣の寢室へかつぎ込んだが、寢台の上へ横になることができなくて肱掛椅子ひしかけいすにも
 たれたままだったそうです。椅子いすの横の台の上には薬びんと急須きゆうすと茶わんとが当時のま
 まに置いてあります。書斎の机でも寢室でも意外に質素なもので驚きました。二階の室へや
 々やにはいろいろな遺物など並べてありますが、私にはゲーテの実験に使つた物理器械や
 標本などがおもしろうございました。シラーの家はいつそう質素と言うよりはむしろ貧し
 いくらいでした。ゲーテの家には制服を着けた立派な番人が数人いましたが、シラーのほ
 うには猫背ねこぜの女がただ一人番していました。裏庭の向こう側の窓はもうよその家で、職人
 が何か細工をしていたようです。シラー町の突き当たりの角は大きな当世ふうのカツフェ
 ーで、ガラス窓の中から二十世紀の男女が、通りかかった毛色の変つた私を珍しそうに

見物していました。町も辻も落ち葉が散り敷いて、古い煉瓦の壁には血の色をした蔓がからみ、あたたかい日光は宮城の番兵の兜に光っておりました。

私はもう十日ばかりでベルリンを引き上げ、ゲッチンゲンへ参ります。

(明治四十三年十月、東京朝日新聞)

ゲッチンゲンから

去年の降誕祭は旅でしました。ウィーンで夜おそく町をうろついて、タンネンバウムを売っているのを見た時にちょうど門松と同じだと思ったのと、ヴェネデイヒで二十五日の晩おびただしい人が狭い暗い町をただぞろぞろ歩くのを見てさびしい思いをしたきりでしたが、ことしはこの田舎で田舎らしい純粹の降誕祭を経験しました。二十二日の晩宿の主婦から、天主教の幼稚園で降誕祭式があるから行かぬかと誘われたので行って見ました。主婦と娘と、家事の見習いかたがた手伝いに来てというスチューバー嬢と四人で行きました。狭い室におもちやのような小さい低い机と椅子を並べて、それにいっぱい子供がうようよしている。みんな貧しそうな子ばかりで、中には風邪を引い

たのがだいぶあって、かわいそうに絶えず咳せきをして騒々しい。白の頭巾ずきんに黒服で丸く肥ふとつた尼シユエスターたちが二人そばに立って監督している。室の後方の扉とびらがぁいてゐる外側には、このへんの貧民がいつぱい立って騒々しく話している。机に並べられた子供の中には延び上がつて後ろの群集を珍しそうにながめるのもあります。するとシユエスターが立って行つて、頭をパタパタとたたいて向こうむきにすわらせる。そのうちに一人の子が、群集の中から阿母おふくろの顔を見つけて、急に恋しくなつて泣き出した。シユエスターが抱いて母親の所へつれて行つてやつとすかして席へつかしたが、やはり涙面をしては後ろを向いている。おぜいの子供の中にはあくびをしているのもある。眠くてコクリコクリするのもあります。堂のすみには大きなタンネンバウムが立ててあつてシユエスターが蠟燭ろうそくに火をつけ始めるとみんなそつちを見る。樹バウムの下バウムの小さなお堂の中に人形の基督孩児クリストキンドが寝クリストキンドている。やがて背中に紗しゃの翼のはえた、頭に金の冠せきを着た子供の天使が二人出て来て基督孩児の両側に立つ。天使の一人はたいへん咳せきが出て苦しうで背中の翼がふるえているが、それでも我慢して一生懸命にすましている。そして大きなかわいい目をして私の顔を珍しそうに見ていました。そのうち老僧フアーターが出て来て挨拶あいさつを始めました。あまり立派でない外套がいとうを着たままで、めがねの上から子供とお客とを等分に見ながら、鼻へ掛かつた声でだいぶ

長く述べ立てました。ワイナハトの起原などから話しましたが、子供の咳は絶え間なしで騒々しく、咳の出ない子はだいたいぶ退屈しているようでした。きょう子供の贈物にする人形の着物をほとんど一手で縫うたシュエスター何某が、病気で欠席されたのは遺憾でありますというような挨拶もありました。この挨拶が済むと、監督の尼さんが音頭をとつて、子供の唱歌が始まり、それから正面の壇へ大きい子供がかわるがわる出て暗唱をする、尼さんが心配して下から小さい声でいつしよに暗唱するのでした。それからワイナハトマンが袋をかついで出て来ておどけて笑わせて、それで式が済みお客さんはみんな別室へはいって、ここへ陳列した子供への贈物を一覽するわけでした。なるほどこれは子供が喜ぶことだろうと思いました。式が済むと、室の外にいた貧民が一時に押し込んで施与を受けようとするので、なかなかの大混雑で、やつとの事で出て来しました。

降誕祭前一週間ほど、市役所前の広場に歳の市が立って、安物のおもちや駄菓子などの露店が並びましたが、いつ行つて見ても不景気でお客さんはあまり無いようでした。売り手のじいさんやばあさんも長い煙管を吹かしたり編み物をしているのでありました。ひやかしている、^{だんな}「ドクトルの旦那さん、^{ワイナハトゲシエンク}降誕祭贈物はいかがです」と呼びかけるのもありました。町の店屋へ買い物に行くと、お前さんの故国でもワイナハトを祝うかなぞ

ときくのがだいぶありました。

降^{ワイナハト}誕祭の初めの日には、主婦^{かみ}さんが、タンネンバウムを飾るから手伝ってくれぬかと

言うので、お手伝いしました。たいそう古くなつたお菓子を黄色いリボンで縛つたのが一箱あつて、これもつるすのだといって、櫓^{もみ}の木へほかの飾り物といっしょにつるしました。これは十四年前におばあさんが買ったお菓子だということでした。同じ宿にいる女優のスタルク嬢も、前だれなどかけて三階から降りて来て手伝いました。いちばん高い枝につるすには梯子^{はしご}が入用でした。あぶないと言つたがきかないで、スタルク嬢がつるしました。その夜の十一時の汽車で主婦^{かみ}さんのむすこが帰つて来るということでした。このむすこも娘も主婦さんの継子^{ままこ}だそうです。むすこはエーベルフェルドの電気工場に勤めているそうで、それがワイナハトには久しぶりで帰るというので、この間じゅうから妹娘^{ゲシエンク}が贈物する襟^{えり}飾^{かざり}を編んでいました。とうとうできあがらないとこぼしていました。都合で夕食後にバウムに灯^ひをつけました。きれいでした。室^{へや}の片側へ机を並べて、皆一同の贈物が陳列してありました。二人の下女もそれぞれ反物をもらつて喜んでいました。親子が贈物を取りかわし「ムッター」「ヘレーネ」とお互いに接吻^{せつぶん}するのはちよつと不思議に思われました。主婦がピアノの前にすわつて、みんなでワイナハトの歌をうたいました。雪の

ふるのがほんとうだそうです、この晩は暴風雨のような雨が降ってひどい天気でした。記念にバウムの写真をとりたいたいと思つて、町ヘマグネシウムを買いに出したら、町の家々の窓にもワイナハトバウムの光が映つて、ところどころ音楽も聞こえて愉快そうに見えました。十一時過ぎにむすこが帰つて来ましたが、私はもう室^{へや}へ帰つて床の中で新聞を見ていましたから、その夜は会いませんでした。夜ふけるまで隣の室で低い話し声が聞こえていました。むすこはそれから三日目の晩食後に帰つて行きましたが、その晩食の席で主婦がサンドウィッチをこしらえて新聞に包んでやりました。汽車の着くのは夜半だからといって、いちばん厚いパンの切れを選^よっていました。食事が済んで汽車の出るまでだいぶ間があるので、むすこはピアノの前へすわつてワイナハトの歌などひいていました。主婦^{かみ}さんとむすこは始終いろいろ話しておりましたが、兄妹の間にはいっこうなんの話もありませんでした。それでもネクタイはやつとできあがつたそうでした。

ううべはジルヴェスターアーベンドというので、またバウムに蠟^{ろうそく}燭をともしました。そして食後にあたたかいプンシュを飲んで、お菓子をかじりました。食堂の棚^{たな}に飾つてある葡萄^{ぶどう}が毎日少しずつなくなるのは不思議だという話が出ました。きょうはたった四つになつたといつてわざわざ見せてくれました。ある主婦が盗み食いをする下女を懲らすため

にお菓子の中へ吐剤を入れておいた話も聞きました。スタルク嬢は下稽古したげいこでおそくなつてやって来ました。この人はいつでも忙しい忙しいといっています。田舎芝居いなかしばいで毎日変わった物を演ずるので、下読みが忙しいそうです。ある日、いつも外出する時間に出ないで室へやにいましたら、隣の食堂で下読みが始まってちよつと驚きました。あとで聞いたらレツシングの「ミンナ・フォン・バルンヘルム」とかであつたそうです。

この大晦日おおみそかの晩十二時に日本へ送る年賀状を出しに出ました。町の辻つじで子供が二三人雪を往來の人に投げつけていました。市役所のへんまで行くと暗やみの広場に人がおおぜいよつていて、町の家の一階二階からは寒いのに窓をあけて下をのぞいている人々の顔が見える。市役所の時計が十二時を打つと同時に隣のヨハン会堂キルヘの鐘が鳴り出す。群集が一度にプロージット・ノイヤール、プロージット・ノイヤールと叫ぶ。爆竹に火をつけて群集の中へ投げ出す。赤や青の火の玉を投げ上げる。遅れて来る人々もあちこちの横町からプロージット・ノイヤールと口々に叫ぶ。町の雪は半分泥どろのようになった上を爪立つまだつて走る女もあれば、五六人隊を組んで歌つて通る若者もある。巡查もにこにこして、時々プロージットの返答をしている。学生が郵便配達をつかまえて、ビールの息とシガーの煙を吹きかけながら、ことしもまたうんと書留を持って来てくれよなどと言つて困らせている。

ふざけて抱き合う拍子にくわえたシガーが泥どろの上へ落ちたのを拾ってはまた吸っています。ブラツツのすみのほうに銅壺どうこをすえてプンシュを売っている男もありました。寺の鐘は十五分ほど鳴っていました。帰って来る途中のさびしい町でもところどころ窓から外を見ている人がありました。帰って寝ようと思ったたら窓の下でだれかプロージット・ノイヤールと大きな声がして、向こうの家からプロージットプロージットとそれに答えているのが聞こえました。

書いている間に日が暮れました。いっこう元日らしいところはありません。きょうから隣の空室へ判事試補マイヤー君が宿をとりました。法科のベルナー君や理科のデフレツガア君などは目下郷里へ帰ってたいへん静かであります。長々と書いたもののいっこうつまらなくなりました。

(明治四十四年二月、東京朝日新聞)

パリから (一)

私の宿はオペラの近くでちよつと引つ込んだ裏町にあります。二三町出るとブルバー

ル・デジタリアンの大通りです。たいてい毎朝ここへ出て角で新聞を買いいます。初めてノートルダムに行った日はここから乗合馬車に乗ってまずバスチールの辻まで行きました。音に聞いた囚獄は跡方ありません。七月の碑という高い記念碑がそびえているばかりです。頂上には自由の神様が引きちぎった鎖と松明を持って立っています。恐ろしい風の強い日で空にはちぎれた雲が飛んでいるので、仰いで見ているとこの神像が空を駆けるように見えました。辻の広場には塵や紙切れが渦巻いていました。

広場に向かって Au canon という料理屋があつて、軒の上に大砲の看板が載せてあります。ここからまた馬車の二階に乗ってオテルドヴィーユまで行きました。通りの片側には八百屋物を載せた小車が並んでいます。売り子は多くばあさんと黒い頬冠り黒い肩掛けをしています。市庁の前で馬車を降りてノートルダムまで渦巻の風の中を泳いで行きました。どこでも名高いお寺といえばみんな一ぺん煤でいぶしていぶし上げてそれからざつとささらに洗い流したような感じがしますが、このお寺もそうです。ほかの名高い伽藍にくらべて別に立派なとも思いませんが両側に相対してそびえた鐘楼がちよつと変わった感じを与えます。入り口をはいるとここに限らず一時まつ暗になる。足もとから不意に鋭い声でプール・レ・ポーヴルと呼びかける。まつ白い大きな頭巾を着た尼さんが袋をさし出

している。袋の底から銀貨が光っていました。はいって来る信徒らは皆入り口の壁や柱にある手水鉢ちしやうずばちに指の先をちよつと入れて、額へ持つて行つて胸へおろしてそれから左の乳から右の乳へ十字をかく。堂のわきのマドンナやクリストのお像にはお蠟燭ろうそくがともつて二三人ずつその前にひざまずいて祈つている。蠟燭を売るばあさんがじろじろと私を見る。堂のまん中へ立つて高い色ガラスの窓から照らす日光を仰いで見るのはやはりよい心持ちがします。午後でしたからお勤めはありません。しかし時々オルガンの低いうなりが響いたり消えたりしていました。右側の回廊の柱の下にマドンナの立像があつてその下にところどころ活版ずりの祈祷きとうの文句が額になつてかけてあります。この祈祷をここですれば大僧正から百日間のアンジュルジャンスを与えるとする。一年ふるみ像のみにひれふしノートルダムのみ名によりて祈りまつる、わが神のみ母よ……」というような文句であります。数世紀の間パリの喜び悲しみをわれらの祖先がここにこの像の前に喜び悲しんだというような文句がある。若い女が黒い紗しゃで顔をかくして手に長い蠟燭ろうそくを持つて像の前に立つた。そして欄にもたれてひざまずいてじつとしている。美しい肩が時々波を打つて、帽子の黒い鳥の羽がふるえるように見えました。マドンナのすぐわきにジャンダークの石膏像せこうぞうがある。この像の仕上げのために喜捨を募るといふ張り札がしてある。回廊の引つ

込んだ所には、僧侶そうりよが懺悔ざんげをきく所がいくつもある。一昨年始めてイタリアのお寺でこの懺悔をしているところを見ていやな感じがしてから、この仕掛けを見るごとに僧侶を憎み信徒をかわいく思います。奥の廊下の扉とびらのわきに「宝蔵見物のかたはここで番人をお待ちください」という張り札がしてある。その前で坊さんが二人立ち話をしている。

門を出ると外はからっ風が吹きあれていました。堂の前を右へ回ると塔へ上る階段がある。

薄暗い螺旋形らせんけいの狭い階段を上って行く。壁には一面のらく書きがしてある。たいてい見物人の名前らしい。登りつめて中段の回廊へ出る。少し霧がかかつてはいるが、サンデニからボアのほうまでも見渡される。鐘楼の下とびらの扉が開いて女が顔を出した。そして塔へ上りますかといって塔の入り口の扉を開く。

「おりて来たらここをたたいてください」といって、ドンドン扉をたたいて見せて、私を塔の中へ閉じこめてしまった。まっ暗な階段を手探りながら登って行って頂上に出る。ひどい風で帽子は着ていられぬ。帽子を脱ぐと髪の毛を吹き乱す。やっとベデカの図を開いてパリじゅうを見おろす。塔の頂の洗いさらされた石材には貝がらの化石が一面についている。寺の歴史やパリの歴史もおもしろいが、この太古の貝がらの歴史も私にはおもしろ

い。屋根のトタンにも石にも一面に名前や日付が刻みつけてあります。塔をおりて扉とびらをドンドンたたく。しばらく待ってもあけてくれぬ。またドンドン靴くつでける。しばらく待っているをやつとあけてくれた。入れちがいにもまた一人塔へ上る人があって、これにも同じ事をいつて外から錠をおろす。「セバストポールの鐘をごらんさない」と先に立つて、反対の側の鐘楼へ導く。黒の頬ほ冠かぶり、黒の肩掛けで、後ろの裳もはぼろぼろにきれかかっている。欄干から恐ろしい怪物の形がいくつもパリを見おろしている。

「この怪物をごらんさない。Penseur. 年じゆうこうやつて頬ほ杖おづえをついたまま考えています」という。また鐘楼へもどつてはいる。左側にあるのがクリミヤから持ってきたいわゆるセバストポールの鐘、右側のがこのブルドン目方が幾キログラムある、中にさがった舌がいくらくらと説明する。鐘をゆり動かす仕掛けを見せてくれる。そばにあつた鉄の棒でガンガンと軽く鳴らして見せました。特別の祭日でなくてはこの鐘はほんとうには撞つかぬそうです。ユーゴーの小説の種にしたギリシア文字のらく書きはほんとうにあるかときいてみましたら、「今はもうありません。あなたもカジモドの話を御存じですね」といつて、青い顔をして笑いました。

もとの入り口の所へ帰ると、さきに塔へ上った男がまた私と同様に内からドンドンたた

いている。御免なさいといってあけてやってまた鐘を見せに連れて行きました。

また次に御報いたします。きようはカルネバルの Mardi-gras ですからにぎわうことだろうと思います。

(明治四十四年三月、東京朝日新聞)

パリから (二)

このあいだこのユーゴー博物館というのを見ました。ユーゴーの住まっていた家で遺物など陳列して公衆に見せているのです。ユーゴーの描いた絵がたくさんあつてなかなかうまいものだと感じました。この人の作物中の光景を描いたいろんな画家の絵もあります。「ミゼラブル」の中でフアンティーヌが往来で乱暴な男に肩へ雪の塊かたまりをおつつけられるところもあります。これはユーゴーが実際に見た出来事だそうです。案内者が萌黄色もえぎいろの背広を着た英国人らしいのに説明していました。萌黄の背広に萌黄の柔らかな帽子を着たこういう男にたいいな所で出くわすのは不思議なくらいです。ノルウェーの船でもこんな男に会ったし、ヴェスーヴの火山でも会いました。いずれも巻き舌のような調子で

「ウエル」とかなんとか言っているのです。階段の壁に額を掛けた印刷物の前に背の低い肩の怒った男が三人立つて大きな声で読んでは何かしゃべっている。これははたしてドイツ人でした。細かい活版を一々読んでいるところがどうしてもドイツ人らしいと思いました。いろんなおもしろいものもありましたが急いで見たのでなんだかまとまった記憶がありません。暇があったらもう一度行つて見たいと思っています。

きょう（三月二十三日）はミカレームの祭日だそうです。パリじゅうのせんたく女の中でいちばん美しいのを女皇に選挙して盛んな行列をやるというのでしたから、昼過ぎに近所の大通りまで出て見ました。人道のそばには至るところコンフェツチを包んだ紙袋を売っています、仮面や紙の塵ちりはら払いや鶏の鳴き声をする笛などを売っている。息を吹き込むとヒョロヒョロと象の鼻のように伸びるおもちゃも売っている。町はたいそうな人出で巡査がおおぜい出て警戒しています。天気がよくて暖かくてなんだか東京の花見時分の心持ちでした。高い家の窓から皆往來を見物している。派手な女帽子が目立つ。窓から時々コンフェツチを投げるのがちようど桜の散るような心持ちがします。時々長い紙ひもを投げる者もある。いろんな仮装をした群れも通る。子供が多い。そのうち行列の前駆に騎兵が来ました。ピカピカ光る兜かぶとに黒い髪の毛をたらしている、キュイラシエと言うのだそう

です。そのあとから楽隊が来る。止まったきりになっている電車の屋根の上はいっぱいの人でそこからも盛んにコンフェツチを投げる。楽隊のあとから奇妙な山車^{だし}が来る。大きな亀^{かめ}の頭に煙突が立つて背に鉄道の役人の人形が載っている。これが左右にグラグラ揺れ動きながらやって来る。これは国有の西部鉄道の悪口だそうです。それからだんだんに各区の女皇の車が来る。女皇たちは皆にこにこして道の両側にキッスを投げかけている。ワアワアと見物人がはやす。日光が強いで暑そうに顔をしかめているものもある。いろいろの商業団体の旗も来る。それから古代の騎士の風^{ふう}をした行列が続く。絵画、音楽、詩などを代表した花車も来る。赤十字の旗を立てた救護隊も交じっている。ずっとあとから「女皇中の女皇」マダムアゼルなにかしと言うのが花車の最高段の玉座に冠をいただいてすわっている。それからいろいろ広告の山車^{だし}がたくさん来て、最後にまた騎兵が警護していました。行列はこれからリボリの大通りシャンゼリゼーのほうへ押し出すのだそうです。大通りは非常な混雑で、私も時々コンフェツチを投げつけられました。粗末なカフエーへはいつて休んでいると、奥のほうの卓を囲んで四五人の男女がマンドリンをひいて歌っています。一昨年始めて西洋の土地を踏んだ晩ゲノアの宿屋で夜ふけに窓の下でマンドリンをひきながら歌う者があつた、その歌の調子がいかにも感傷的と言うのか卑俗と言うのか妙な

感じがしましたがきょうのもやはり同じ感じがしました。こういう調子はドイツでは聞きませんでした。帰って外套がいとうをふるつたら室へやじゆうへコンフェツチがいっぱいに散らばりました。

四五日前オペラでグノーのファウストを聞きました。メフィストの低音が気に入りました。道具立ての立派で真に迫ること、光線の使用の巧みなことはどこでも感心します。音楽の始まる前の合図にガタンガタンと板の間をたたくような音をさせるのはドイツのと違って滑こっけい稽な感じがしました。最後の前の幕にバレエがあります。国にいた時分「スチュディオ」が何かに載せたドガーの踊り子のパステル絵を見て、なんだかばかげたつまらないもののような気がしましたが、その後バレエというものも見、それからドガーの本作の絵も見てから考えてみると、とにかくこの人の絵はこういう一種の光景、運動、色彩、感じというようなものをかなり真実に現わしたものだと思いました。

役者の唱歌は昨年ウィーンで聞いたほうがむしろよかったと思います。この事を同宿のドイツ人に話したら、オペラはドイツに限るのだと言っていました。ここではワグネル物をたとえば四幕のものなら二幕ぐらいに切って演じたり、勝手な事をすると言つてひどく憤慨していました。

（明治四十四年五月、東京朝日新聞）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦随筆集 第一巻」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1947（昭和22）年2月5日第1刷発行

1963（昭和38）年10月16日第28刷改版発行

1997（平成9）年12月15日第81刷発行

入力：田辺浩昭

校正：かとうかおり

2003年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

先生への通信

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>